

石川啄木

時代閉塞の現状

時代閉塞の現状

（強権、純粹自然主義の最後及び明日の考察）

一

数日前本欄（東京朝日新聞の文芸欄）に出た「自己主張の思想としての自然主義」と題する魚住氏の論文は、今日に於ける我々日本の青年の思索的生活の半面——閑却されている半面を比較的明瞭に指摘した点に於て、注意に値するものであった。蓋し我々が一概に自然主義という名の下に呼んで来た所の思潮には、最初からして幾多の矛盾が雑然として混在していたに拘らず、今日まで

未だ何等の嚴密なる檢覈けんかくがそれに対して加えられずにいるのである。彼等の両方——所謂自然主義者も亦所謂非自然主義者も、早くから此矛盾を或程度までは感知していたに拘らず、共に其「自然主義」という名を最初から余りにオオソライズして考えていた為に、此矛盾を根柢まで深く解剖、檢覈する事を、そうしてそれが彼等の確執を最も早く解決するものなる事を忘れていたのである。斯くて此「主義」は既に五年の間間断なき論争を続けられて来たに拘らず、今日猶其最も一般的なる定義をさえ与えられずにいるのみならず、事實に於て既に純粹[△]純粹[△]

自然主義が其理論上の最後を告げているに拘らず、同名の下に繰返さるる全く別な主張と、それに対する無用の反駁とが、其熱心を失った状態を以て何時までも継続されている。そうして凡て此等の混乱の渦中に在って、今や我々の多くは其心内に於て自己分裂のいたましき悲劇に際会しているのである。思想の中心を失っているのである。

自己主張的傾向が、数年前我々が其新しき思索的生活を始めた当初からして、一方それと矛盾する科学的、運命論的、自己否定的傾向（純粹自然主義）と結合してい

た事は事実である。そうしてこれは屢後者の一つの属性の如く取扱われて来たに拘らず、近来（純粹自然主義が彼の觀照論に於て実人生に對する態度を一決して以來）の傾向は、漸く両者の間の溝渠こうきよの遂に越ゆべからざるを示している。此意味に於て、魚住氏の指摘は能く其時を得たものといふべきである。然し我々は、それと共に或重大なる誤謬が彼の論文に含まれているのを看過することが出来ない。それは、論者が其指摘を一の議論として発表する為に——「自己主張の思想としての自然主義^{△△△△}」を説く為に、我々に向つて一の虚偽を強要している事である。

相矛盾せる両傾向の不思議なる五年間の共棲を我々に理解させるために、其処に論者が自分勝手に一つの動機を捏造している事である。即ち、其共棲が全く両者共通の怨敵たるオオソリテイ——国家というものに対抗する為に政略的に行われた結婚であるとしている事である。

それが明白なる誤謬、寧ろ明白なる虚偽である事は、此処に詳しく述べるまでもない。我々日本の青年は未だ嘗て彼の強権に対して何等の確執をも醸した事がないのである。従って国家が我々に取って怨敵となるべき機会も未だ嘗て無かったのである。そうして此処に我々が論

者の不注意に対して是正を試みるのは、蓋し、今日の我々にとって一つの新しい悲しみでなければならぬ。何故ならば、それは実に、我々自身が現在に於て有っている理解の猶極めて不徹底の状態に在る事、及び我々の今日及び今日までの境遇が彼の強権を敵とし得る境遇の不幸よりも更に一層不幸なものである事、自ら承認する所以であるからである。

今日我々の中誰でも先ず心を鎮めて、彼の強権と我々自身との関係を考へて見るならば、必ず其処に予想外に大きい疎隔（不和ではない）の横たわっている事を発見

して驚くに違いない。じつに彼の日本の総ての女子が、明治新社会の形成を全く男子の手に委ねた結果として、過去四十年の間一に男子の奴隷として規定、訓練され（法規の上にも、教育の上にも、将又實際の家庭の上にも）、しかもそれに満足——少くともそれに抗弁する理由を知らずにいる如く、我々青年も亦同じ理由によって、総て国家に就いての問題に於ては（それが今日の問題であらうと、我々自身の時代たる明日の問題であらうと）、全く父兄の手に一任しているのである。これ我々自身の希望、若くは便宜によるか、父兄の希望、便宜によるか、或は又両

者の共に意識せざる他の原因によるかは別として、兎も角も以上の状態は事実である。国家ちよう問題が我々の脳裡に入つて来るのは、ただそれが我々の個人的利害に關係する時だけである。そうしてそれが過ぎてしまえば、再び他人同志になるのである。

二

無論思想上の事は、必ずしも特殊の接触、特殊の機会によつてのみ発生するものではない。我々青年は誰しも其或時期に於て徴兵検査の為に非常な危惧きぐを感じてい

る。又総ての青年の権利たる教育が其一部分——富有なる父兄を有つた一部分だけの特権となり、更にそれが無法なる試験制度の為に更に又約三分の一だけに限られてゐる事実や、国民の最大多数の食事を制限してゐる高率の租税の費途なども目撃してゐる。凡そ此等の極く普通な現象も、我々をして彼の強権に対する自由討究を始めしむる動機たる性質は有つてゐるに違ひない。然り、寧ろ本来に於ては我々は已に業すに其自由討究を始めてゐべき筈なのである。にも拘らず實際に於ては、幸か不幸か我々の理解はまだ其処まで進んでゐない。そうして其

処には日本人特有の或論理が常に働いている。

しかも今日我々が父兄に対して注意せねばならぬ点が其処に存するのである。蓋し其論理は我々の父兄の手に在る間は其国家を保護し、発達さする最重要の武器なるに拘らず、一度我々青年の手に移されるに及んで、全く何人も予期しなかつた結論に到達しているのである。「国家は強大でなければならぬ。我々は夫を阻害すべき何等の理由も有っていない。但し我々だけはそれにお手伝いするのは御免だ！」これ実に今日比較的教養ある殆ど総ての青年が国家と他人たる境遇に於て有ち得る愛国心の

全体ではないか。そうして此結論は、特に実業界などに志す一部の青年の間には、更に一層明晰になっている。曰く、「国家は帝国主義で以て日に増し強大になつて行く。誠に結構な事だ。だから我々もよろしくその真似をしなければならぬ。正義だの、人道だのという事にはお構いなしに一生懸命儲けなければならぬ。国の為なんて考える暇があるものか！」

彼の早くから我々の間にざんにゆう竄入している哲学的虚無主義の如きも、亦此愛国心の一步だけ進歩したものである事は言うまでもない。それは一見彼の強権を敵としてい

るようであるけれども、そうではない。寧ろ当然敵とすべき者に服従した結果なのである。彼等は実に一切の人間の活動を白眼を以って見る如く、強権の存在に対しても亦全く没交渉なのである——それだけ絶望的なのである。

かくて魚住氏の所謂共通の怨敵が実際に於て存在しない事は明らかになった。無論それは、彼の敵が敵たる性質を有っていないという事でない。我々がそれを敵にしていけないという事である。そうして此結合（矛盾せる両思想の）は、寧ろそういう外部的原因からではなく、実

にこの両思想の対立が認められた最初から今日に至る迄の間、両者が共に敵を有たなかつたという事に原因しているのである。(後段参照)

魚住氏は更に同じ誤謬から、自然主義者の或人々が嘗て其主義と国家主義との間に或妥協を試みたのを見て、「不徹底」だと咎めている。私は今論者の心持だけは充分了解することが出来る。然し既に国家が今日まで我々の敵ではなかつた以上、また自然主義という言葉の内容たる思想の中心が何処にあるか解らない状態にある以上、何を標準として我々はしかく軽々しく不徹底呼ばわ

りをする事が出来よう。そうして又其不徹底が、たとひ論者の所謂自己主張の思想から言つては不徹底であるにしても、自然主義としての不徹底では必ずしも無いのである。

すべて此等の誤謬は、論者が既に自然主義という名に含まるる相矛盾する傾向を指摘して置きながら、尚且それに対して厳密なる検覈を加えずにいる所から来ているのである。一切の近代的傾向を自然主義という名によつて呼ぼうとする笑うべき「羅馬帝国」的妄想から来ているのである。そうして此無定見は、実は、今日自然主義と

いう名を口にする殆んど総ての人の無定見なのである。

三

無論自然主義の定義は、少くとも日本に於ては、未だ定まっていない。従つて我々は各々其欲する時、欲する処に勝手に此名を使用しても、何処からも咎められる心配は無い。然しそれにしても思慮ある人はそう言う事はしない筈である。同じ町内に同じ名の人が五人も十人も有つた時、それによつて我々の感ずる不便は何れだけであるか。其不便からだけでも、我々は今我々の思想其者

を統一すると共に、又其名にも整理を加える必要があるのである。

見よ、花袋氏、藤村氏、天溪氏、抱月氏、泡鳴氏、白鳥氏、今は忘られているが風葉氏、青果氏、其他——すべて此等の人は皆齊しく自然主義者なのである。そうして其各々の間には、今日既に其肩書以外には殆ど全く共通した点が見出し難いのである。無論同主義者だからと言つて、必ずしも同じ事を書き、同じ事を論じなければならぬという理由はない。それならば我々は、白鳥氏対藤村氏、泡鳴氏対抱月氏の如く、人生に対する態度まで

が全く相違している事実を如何に説明すればよいのであるか。尤も此等の人の名は既に半ば歴史的に固定しているのであるから仕方が無いとしても、我々は更に、現実暴露、無解決、平面描写、劃一線の態度等の言葉によって表わされた科学的、運命論的、静止的、自己否定的の内容が、其後漸く、第一義慾とか、人生批評とか、主観の權威とか、自然主義中の浪漫的分子とかいう言葉によって表さるる活動的、自己主張的内容に変わって来た事や、荷風氏が自然主義者によって推讚の辞を贈られた事や、今度また「自己主張の思想としての自然主義」とい

う論文を読まされた事などを、どういう手続を以て承認すれば可いのであるか。其等の矛盾は、啻に一見して矛盾に見える計りでなく、見れば見る程何処迄も矛盾して、いるのである。かくて今や「自然主義」という言葉は、刻一刻に身体も顔も變つて来て、全く一個のスフィンクスに成っている。「自然主義とは何ぞや？」其中心は何処に在りや？」斯く我々が問を發する時、彼等の中一人でも起つてそれに答え得る者があるか。否、彼等は一様に起つて答えるに違いない、全く別々な答を。

更に此混雜は彼等の間のみに止まらないのである。今

日の文壇には彼等の外に別に、自然主義者という名を肯じない人達がある。然し其等の人達と彼等との間には抑も何だけの相違が有るのか。一例を挙げるならば、近き過去に於て自然主義者から攻撃を享けた享樂主義と觀照論當時の自然主義との間に、一方が稍贅で他方が稍つつましやかだという以外に、何だけの間隔が有るだろうか。新浪漫主義を唱える人と主觀の苦悶を説く自然主義者との心境に何れだけの扞格が有るだろうか。淫売屋から出て来る自然主義者の顔と女郎屋から出て来る芸術至上主義者の顔と其表れている醜惡の表情に何等かの高下が有

るだろうか。少し例は違うが、小説『放浪』に描かれたる肉・靈・合・致・の・全・我・的・活・動・なるものは、其論理と表象の手法が新しくなつた外に、嘗て本能満足主義という名の下に考量されたものと何れだけ違つているだろうか。

魚住氏はこの一見収攬しゆうらんし難き混乱の状態に對して、極めて都合の好い解釈を与えている。曰く、「此の奇なる結合（自己主張の思想とデターミニスチックの思想の名が自然主義である」と。蓋しこれ此状態に對する最も都合の好い、且最も氣の利いた解釈である。然し我々は覺悟しなければならぬ。此解釈を承認する上は、更に或

驚く可き大罪を犯さねばならぬという事を。何故ならば、人間の思想は、それが人間自体に関するものなる限り、必ず何等かの意味に於て自己主張的、自己否定的の二者を出ずることが出来ないのである。即ち、若し我々が今論者の言を承認すれば、今後永久に一切の人間の思想に對して、「自然主義」という冠詞を付けて呼ばねばならなくなるのである。

此論者の誤謬は、自然主義發生當時に立歸つて考えれば一層明瞭である。自然主義と称えらるる自己否定的の傾向は、誰も知る如く日露戦争以後に於て初めて徐々に

起つて来たものであるに拘らず、一方はそれよりもずっと以前——十年以前から在つたのである。新しき名は新しく起つた者に与えらるべきであらうか、將又それと前から在つた者との結合に与えらるべきであらうか。そうして此結合は、前にも言つた如く、両者共敵を有たなかつた（一方は敵を有つべき性質のものでなく、一方は敵を有つていなかつた）事に起因していたのである。別の見方をすれば、両者の経済的状态の一時的共通（一方は理想を有つべき性質のものではなく、一方は理想を失つていた）に起因しているのである。そうして更に詳しく言えば、

純粹自然主義は実に反省の形に於て他の一方から分化したものであつたのである。

かくて此結合の結果は我々の今日迄見て来た如くである。初めは両者共仲好く暮していた。それが、純粹自然主義にあつては単に見、而して承認するだけの事を、其同棲者が無遠慮にも、行い、且つ主張せんとするようになって、其処に此不思議なる夫婦は最初の、而して最終の夫婦喧嘩を始めたのである。実行と観照との問題がそれである。そうして其論争によつて、純粹自然主義が其最初から限定されている劃一線の態度を正確に決定し、

其理論上の最後を告げて、此処に此結合は全く内部に於て断絶してしまつてゐるのである。

四

斯くて今や我々には、自己主張の強烈な欲求が残つてゐるのみである。自然主義発生当時と同じく、今猶理想を失い、方向を失い、出口を失つた状態に於て、長い間鬱積して来た其自身の力を独りで持余してゐるのである。既に断絶してゐる純粹自然主義との結合を今猶意識しかねてゐる事や、其他すべて今日の我々青年が有つて

いる内訌的、自滅的傾向は、この理想喪失の悲しむべき状態を極めて明瞭に語っている。——そうしてこれは実に「時代閉塞」の結果なのである。

見よ、我々は今何処に我々の進むべき路を見出し得るか。此処に一人の青年が有って教育家たらむとしているとする。彼は教育とは、時代が其一切の所有を提供して次の時代の為にする犠牲だという事を知っている。然も今日に於ては教育はただ其「今日」に必要な人物を養成する所以に過ぎない。そうして彼が教育家として為し得る仕事は、リーダーの一から五までを一生繰返すか、

或いは其他の学科の何れも極く初歩のところを毎日々々死ぬまで講義する丈の事である。若しそれ以外の事をなさんとすれば、彼はもう教育界にいる事が出来ないのである。又一人の青年があつて何等か重要な発明を為さんとしているとする。しかも今日に於ては、一切の発明は実に一切の労力と共に全く無価値である——資本という不思議な勢力の援助を得ない限りは。

時代閉塞の現状は啻にただそれら個々の問題に止まらないのである。今日我々の父兄は、大体に於て一般学生の氣風が着実になつたと言つて喜んでいる。しかも其着実と

は単に今日の学生のすべてが其在学時代から奉職口の心配をしなければならなくなつたという事ではないか。そうしてそう着実になつてゐるに拘らず、毎年何百という官私大学卒業生が、其半分は職を得かねて下宿屋にごろごろしているではないか。しかも彼等はまだまだまだ幸福な方である。前にも言った如く、彼等に何十倍、何百倍する多数の青年は、其教育を享ける権利を中途半端で奪われてしまふではないか。中途半端の教育は其人の一生を中途半端にする。彼等は実に其生涯の勤勉努力を以てしても尚且三十円以上の月給を取る事が許されないのである。

る。無論彼等はそれに満足する筈がない。かくて日本には今「遊民」という不思議な階級が漸次其数を増しつつある。今やどんな僻村へ行つても三人か五人の中学卒業者がいる。そうして彼等の事業は、実に、父兄の財産を食い減す事と無駄話をする事だけである。

我々青年を圍繞する空気は、今やもう少しも流動しなくなつた。強権の勢力は普く国内に行亘っている。現代社会組織は其隅々まで発達している。——そうして其発達が最早完成に近い程度まで進んでいる事は、其制度の有する欠陥の一日一日明白になつてきている事によつて知るこ

とが出来る。戦争とか豊作とか饑饉とか、すべて或偶然の出来事の発生するでなければ振興する見込の無い一般経済界の状態は何を語るか。財産と共に道德心をも失つた貧民と売淫婦との急激なる増加は何を語るか。将又今日我邦に於て、其法律の規定している罪人の数が驚くべき勢いを以て増して来た結果、遂に見すみす其国法の適用を一部に於て中止せねばならなくなっている事実（微罪不検挙の事実、東京並びに各都市に於ける無数の売淫婦が拘禁する場所が無い為に半公認の状態にある事実）は何を語るか。

斯くの如き時代閉塞の現状に於て、我々の中最も急進的な人達が、如何なる方面に其「自己」を主張しているかは既に読者の知る如くである。実に彼等は、抑えても抑えても抑えきれぬ自己其者の圧迫に堪えかねて、彼等の入れられている箱の最も板の薄い処、若くは空隙（現代社会組織の欠陥）に向つて全く盲目的に突進している。今日の小説や詩や歌の殆どすべてが女郎買、淫売買、乃至野合、姦通の記録であるのは決して偶然ではない。しかも我々の父兄にはこれを攻撃する権利はないのである。何故なれば、すべて此等は国法によつて公認、若く

は半ば公認されている所ではないか。

そうして又我々の一部は、「未来」を奪われたる現状に對して、不思議なる方法によつて其敬意と服従とを表している。元祿時代に對する回顧がそれである。見よ、彼等の亡国的感情が、其祖先が一度遭遇した時代閉塞の状態に對する同感と思慕とによつて、如何に遺憾なく其美しさを發揮しているかを。

斯くて今や我々青年は、此自滅の状態から脱出する為に、遂に其「敵」の存在を意識しなければならぬ時期に到達しているのである。それは我々の希望や乃至其他の

理由によるのではない、実に必至である。我々は一斉に起つて先ず此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元祿の回顧とを罷めて全精神を明日の考察——我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬのである。

五

明日の考察！　これ実に我々が今日に於て為すべき唯一である、そうして又総てである。

その考察が、如何なる方面に如何にして始めらるべきであるか。それは無論人々各自の自由である。然し此際に於て、我々青年が過去に於て如何に其「自己」を主張し、如何にそれを失敗して来たかを考えて見れば、大体に於て我々の今後の方が予測されぬでもない。

蓋し、我々明治の青年が、全く其父兄の手によって造り出された明治新社会の完成の為に有用な人物となるべく教育されて来た間に、別に青年自体の権利を認識し、自発的に自己を主張し始めたのは、誰も知る如く、日清戦争の結果によつて国民全体が其国民的自覚の勃興を示

してから間もなくの事であつた。既に自然主義運動の先せん蹤しようとして一部の間認められている如く、樗牛の個人主義が即ち其第一声であつた。(そうして其際に於ても、我々はまだ彼の既成強権に対して第二者たる意識を持ち得なかつた。樗牛は後年彼の友人が自然主義と国家的觀念との間に妥協を試みた如く、其日蓮論の中に彼の主義対既成強権の压制結婚を企てている。)

樗牛の個人主義の破滅の原因は、彼の思想それ自身の中にあつた事は言うまでもない。即ち彼には、人間の偉大に関する伝習的迷信が極めて多量に含まれていたと共

に、一切の「既成」と青年との間の関係に対する理解が遙かに局限的（日露戦争以前に於ける日本人の精神的活動があらゆる方面に於て局限的であつた如く）であつた。そうして其思想が魔語の如く（彼がニイチエを評した言葉を借りて言えば）当時の青年を動かしたにも拘らず、彼が未来の一設計者たるニイチエから分れて、其迷信の偶像を日蓮という過去の人間に発見した時、「未来の権利」たる青年の心は、彼の永眠を待つまでもなく、早く既に彼を離れ始めたのである。

この失敗は何を我々に語っているか。一切の「既成」

を其儘にして置いて、その中に自力を以て我々が我々の天地を新に建設するという事は全く不可能だという事である。斯くて我々は期せずして第二の経験——宗教的欲求の時代に移った。それは其當時に於ては前者の反動として認められた。個人意識の勃興が自ら其跳梁に堪えられなくなつたのだと批評された。然しそれは正鵠を得ていない。何故なれば其処にはただ方法と目的の場所との差違が有るのみである。自力によって既成の中に自己を主張せんとしたのが、他力によって既成の外に同じ事を成さんとしたまでである。そうして此第二の経験も見事

に失敗した。我々は彼の純粹にて且つ美しき感情を以て語られた梁川の異常なる宗教的實驗の報告を読んで、其遠神清淨なる心境に対して限りなき希求憧憬の情を走らせながらも、又常に、彼が一個の肺病患者であるという事実を忘れなかつた。何時からとなく我々の心にまぎれ込んでいた「科学」の石の重みは、遂に我々をして九臯きゆうこうの天に飛翔する事を許さなかつたのである。

第三の經驗は言うまでもなく純粹自然主義との結合時代である。此時代には、前の時代に於て我々の敵であつた科学は却つて我々の味方であつた。そうして此經驗は、

前の二つの経験にも増して重大なる教訓を我々に与えている。それは外ではない。「一切の美しき理想は皆虚偽である！」

かくて我々の今後の方針は、以上三次の経験によつて略限定されているのである。即ち我々の理想は最早「善」や「美」に対する空想である訳はない。一切の空想を峻拒して、其処に残る唯一つの眞実——「必要」！　これ実に我々が未来に向つて求むべき一切である。我々は今最も厳密に、大胆に、自由に「今日」を研究して、其処に我々自身にとっての「明日」の必要を発見しなければ

ならぬ。必要は最も確實なる理想である。

更に、既に我々が我々の理想を発見した時に於て、それを如何にして如何なる処に求むべきか。「既成」の内にか。外にか。「既成」を其儘にしてか、しないでか。或は又自力によつてか、他力によつてか、それはもう言うまでもない。今日の我々は過去の我々ではないのである。従つて過去に於ける失敗を再びする筈はないのである。

文学——彼の自然主義運動の前半、彼等の「眞実」の発見と承認とが、「批評」として刺戟を有っていた時代が過ぎて以来、漸くただの記述、ただの説話に傾いて来

ている文学も、斯くて復た其眠れる精神が目を覚して来るのではあるまいか。何故なれば、我々全青年の心が「明日」を占領した時、其時「今日」の一切が初めて最も適切なる批評を享くるからである。時代に没頭しては時代を批評する事が出来ない。私の文学に求むる所は批評である。

(一九一〇年八月)

日本文学電子図書館

時代閉塞の現状

著 者：石川啄木

制作者：宮澤一郎

底 本：「世界文芸論集」、
世界教養全集 別巻 2
平凡社

1968年3月31日 7版発行

日本文学電子図書館